中學國文教科

375.9
Y019
資料室

41817
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
1997

資料室

修正十二版
文部省檢定濟
大正七年一月九日　中學校國語科教科書

中學國文教科書

吉田彌平編

卷三

東京　光風館藏版

375.9
Y019

The Middle School
Text Book
of
Japanese
Yahei Yoshida

東京高等師範學校圖書之印
廣島大學教
46546

Kifukwan Co
The sixth
Urajinpo Cho
Kanda ward
Tokyo city

中學國文教科書 卷三

目次

一 潮の岬（口語文）……坪内逍遙 一
二 大海原（新體詩）……萩野由之 六
三 學徒に示す……新井白石 一〇
四 土屋昌恒……大町桂月 一四
五 讀物を問へるに答ふ（書牘文）……夏目漱石 一八
六 峠の茶屋（口語文）……
七 あけゆく花（短歌）……

八 札幌農園……菊池幽芳 三三
九 生存競爭（口語文）……丘淺次郎 三八
一〇 自然の色……德富蘆花 四六
一一 南洋の興趣（口語文）……四九
一二 舟路（新體詩）……島崎藤村 五四
一三 珊瑚礁（口語文）……山崎直方 五七
一四 武士氣質……新井白石 六四
一五 閉塞隊その一……七〇
一六 閉塞隊その二……七六
一七 旅順艦隊全滅公報……八五
一八 太刀奉獻記その一（口語文）……八七

一九 太刀奉獻記その二（口語文）……九四
二〇 昇仙峽（書牘文）……德富蘆花 一〇二
二一 天龍川（新體詩）……大和田建樹 一〇六
二二 松坂の一夜（口語文）……佐々木信綱 一〇九
二三 歌話……中邨秋香 一一八
二四 秋の夜……幸田露伴 一二四
二五 實に面白かつた（書牘文）……正岡子規 一二六
二六 豐太閤その一……三上參次 一三一
二七 豐太閤その二……三上參次 一三八
二八 死して惜まるゝ人となれ……嘉納治五郎 一四二

目次終

廣島大學圖書之印

潮の岬　紀伊の南端の岬。

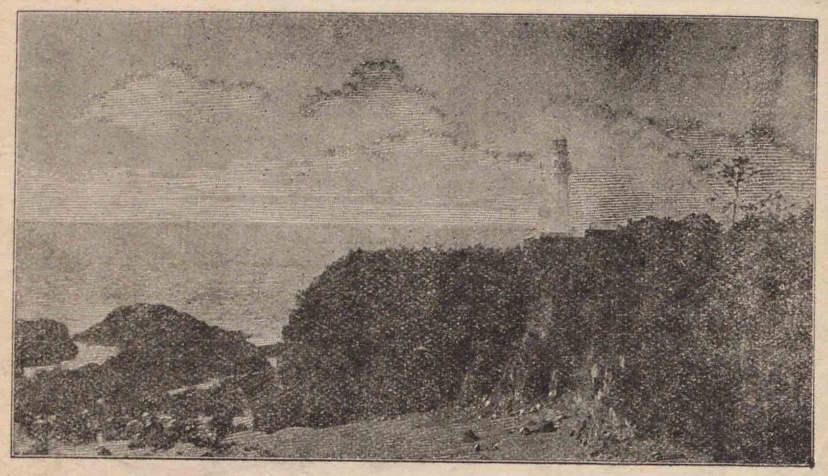
中學國文教科書　卷三

一　潮の岬

とかくして、潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙に打續いて、其の間に薊・蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松がぽろりぽろりと處々に立つて居て、それに繋いだ牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が、此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑ひ聲がたえ〴〵に聞える。

右の方には、燈臺の白い壁が巍然として空中に聳え、左には、無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく列んで、之に太平洋の大波がどうどうと、寄せては返し、寄せては返ししてゐる。

余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐるのだ。打開けた太平洋の海面、煙波縹緲として、其の果何處としも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニーを隔てゝ、濠太



潮の岬

利亞の大陸に相對し、東は遙に太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフォルニヤ州のロス、アンゼルスまで間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實、此の一角が卽ち日本と世界と

の接觸する處なのだから面白い。

まづ此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ことに海軍の望樓に至つては、夜となく晝となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、內外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては其の用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々とて、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來るのは無理もない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の二十二日、去年の今日は朝日世界一周會で、愈〻紐育の見物を終へて、明日大西洋に乘り出さうとした日、一昨年の今日は丁度今頃巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎて、ケント州の櫻・桃・杏・梨今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃である。愈〻これは世界的になつて來た。折しも望樓で頻に信號旗が揚る。それとばかり、友

四月二十二日
明治四十二年。

にはかにかうそはぐかたち。

ぶ、ゆるときにありて色をあらはす。

を促して、急いで見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばちく〳〵ぱちとけたゝましい音を立てゝ、電信をかけてゐる。今まで靜まり返つてゐた此の日の本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。（「へちまのかは」に據る）

坪内逍遙
名は雄藏。文學博士。早稻田大學名譽教授。（一八五九—一九三五）

二　大海原

大なる哉、大海原。

坪内逍遙

朝に夕に、どう〳〵と
動き、轟き、夜もすがら
大浪小浪寄せ返る。
いづこに打たぬ浪を見ん。
いつ浪の音を聞かざらん。

大なる哉、大海原。
世界の山々ことごとく
崩すとも、海は埋るまじ。
世界の川々絶間なく

注げども、海はとこしへに
不增不減の瑠璃の色。

長閑けき樣は海にあり。
風凪ぎはてし春の沖に、
朧にうつる月見れば、
あらぶる心もなぎぬべし。
松島かげの朝ぼらけ、
蓬萊山もよそならず。

凄じさはた海にあり。
春秋二季の大あれに、
はやて起つて浪立てば、
甲鐵艦も木の葉とたゞよひ、
大高じほの逆卷けば、
村々流れて跡もなし。

山は崩れ川は涸れ、
國興亡し、人變り、
陸には古今の別あれど、

海原のみは、開闢の
神代の姿そのまゝに
動き、轟き、寄せ返る。（國語讀本）

三　學徒に示す

萩野由之
文學博士。東京帝國大學文科大學教授。（一八三〇―）

萩野由之

精深微妙の眞理を究むといふ高尚なる學問は言ふまでもなし、僅に一技・一藝の上手と言はれんだにも、その心を潛めず、放埒に明し暮しては、事の成らんこと覺束なし。　苟も師父の教を受け先輩の講說を聞く時に當りては、その放心を收めんこと最も肝要なるべし。　若し空を渡る鴻鵠に心を馳せ、門を過ぐる車馬に目を奪はれなば、心こゝにあらずして、視れども見えず、聽けども聞えざるべし、いかで學業の成るを望むべけん。　何事も古人を學ぶといふは僻事なるべけれど、その善きものは擇びて師とすべきにこそ。　今、古人勉學の一端を擧げて反省の助とせん。

戰國の頃、山本勘助晴幸とて、甲斐の武田の臣にて、軍略世にすぐれたる人ありき。　嘗て衆人の中にて軍事の物語しけるに、その席に、小宮山助太郎・小山田八彌・秋山友市といふ三人の小兒ありしが、小宮山はう

づくまりて謹聽し、八彌は笑語し、友市は度々座を立ちけり。勘助人に語りて曰く、「助太郎は必ず事を濟すものならん。二人は必ずく用には立つまじきものなり。方々よくその行末を檢せられよ。」といひけり。後に武田氏衰へて、勝頼天目山に敗北せし時、果して二人は出奔し、助太郎は君の勘當蒙り居たりしかども遂に殉死せり。世に小宮山内膳友信といふは、この助太郎が後の名なりとぞ。

又天和の頃、北村季吟は歌・連歌の上手にて、後に幕府に召出され、和學方となりて新に家を興し、近代の

文學家なり。この人はじめ花の下の宗匠となり、精靈會の百韻しける席に、その子湖春、十四五歳ばかりなるが侍りけるに、つと立ちて廁に行かんとせり。季吟怒りて、「やよ悴、汝連歌に身を入れて居垂れにしたりと人に言はれんは、道に於て恥にあらず。かゝる席にて中座せんとは、いみじきうつけ者ぞ。」といたく誡めけりといへり。

いづれもその學に心を入れて他事なきことかくの如くならざれば、世に勝れたる堪能にはなり難きを誡めたるなり。汝等苟も名を成さんと思はゞ、こゝ

に深く思を致すべきものぞ。伊藤東涯先生が「道を學ぶものは孤軍大敵に臨み、單身重圍に陷りたらんが如く、一尺を進むとも一寸を退くことなかれ。」といはれしは、實に思慮ある言といふべし。（國文）

四　土屋昌恆

新井白石

武田が家滅ぶる時に當つて、一族郎從、悉く心變じて後矢射けるほどに、勝頼行くべき方なくして、田野の奥天目山といふ處に落行く。かたき此處彼處に起つて、今は逃るべき樣もなかりしかば、勝頼は川の邊

新井白石
名は君美。將軍家宣の侍講。（一六五七―一七二五）
田野
甲斐國東八代郡田野村。

に敷皮敷かせて敵を待つ。跡部尾張守此處に落合つて、つと馳せぬけて逃げんとす。總藏昌恆きつと見て、「やあいかに跡部、御最期を見捨て參らせて、いづくまでかは逃げのびん。不覺さよ。」といふまゝに、大の中指拔出し、よつ引いて放つ。跡部たゞ中をぐつと射貫かれて、馬より落ちて死してけり。

總藏は勝頼に向ひ、「御敵已に近づきぬ。昌恆防矢仕らん。御心靜かに御自害あるべし。」と申しもあへず、矢束解いて押亂し、近づく敵を差しつめ引きつめ散散に射る。無碍に矢頃は近かりけり。一筋もあだ

小原兄弟
小原丹後。小原下總。

四郎
武田四郎勝頼。

矢なく、死生は知らず、矢庭に射倒さるゝ者こそ多かりけれ。その隙に、昌恆が舍兄金丸助六郎昌義・小原兄弟、女房達の介錯し、腹かき切つて伏す。勝頼自ら太刀を拔き、あたりを拂ひ、切つて廻る。御曹司信勝、これも同じく續きたり。昌恆矢種射盡して、打物の鞘をはづし、斬つて出てんとする處を、敵六人が槍に貫かれ、忽ちに地に倒る。四郎不便にや見給ひけん、左の手にて槍一々にかなぐり捨て、六人をかけず斬つて捨つ。我が身また敵三人が槍に貫かれ、父子同じく討たれ給ひけり。昌恆時に二十七なり。

大膳入道
武田信玄。

新井白石

あはれ、故大膳入道は、士を養ひ、武を講ぜしこと二十餘年、人を殺し、地を開きしこと五六州、されば、みづから天下は定むるに足らずと思はれしに、身死し、骨いまだ冷かならざるに、國破れ、家滅ぶるに至つては、さしも年頃、恩にも誇り、功をも恃みし家子・郎等、强きものは君父に背

類、種、類、

重なりあるもの、

かさなりて

きて後矢射、弱きたぐひは妻子携へて逃げ隠れ、この日天正十年三月十一日、四郎と共に死したりしは、侍雜人・僧・童、都合わづかに四十四人、中にも一方の大將、侍のつかさなどいはれしもの、日頃の契を違へぬは、總藏昌恆たゞ一人、兄弟三人、同じく死せしこそ無慙なれ。（藤榮譜）

兄弟　仲兄金丸助六郎昌義。末弟秋山源藏貞氏。

己が竟見の謙稱

大町桂月　名は芳衛。文章家。（一八六九―一九一〇）

五　讀物を問へるに答ふ

大町桂月

青年は如何なる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申述候。

眞似をする性質

えらぶこと、

すぐれたる者を含む点

人は何人も摸擬性を有し居候、また感染性を有し居候。而して、一生の中この二性の最も熾なるは、少年時代若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割出さゞるべからずと存候。

此の頃の青年の一般の缺點は、歴史・傳記の知識

神經が過敏になり。

に乏しき事に候。隨つて今の青年は聖人・君子・英雄・豪傑・志士・仁人・大學者・大宗教家・忠臣・孝子などに接することを極めて少く、從つて人物が小さくなり、眼界が狹くなりて、神經のみが尖り申候。是實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、「請ふ、大いに史傳を讀まれよ」。

又一つ今の青年に通じたる缺點之あり候。それは個人的若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶緣して、おのれ一代と思ふ考が餘りに強く候。從つて重厚・雄大の氣風なくして、こせこせちよこ〳〵する小人物が多く候。これも史傳と親しまぬより起ることに候。史傳を讀めば、「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」といふことが、よく解り申すべく、行が自ら重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

申すまでも之なく候へども、國家の盛衰興亡は全く人物の如何にあり、盛なる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申候。我が國將來の發展に就いても、國民の人

格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くはなしと存候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず讀誦せられよ。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が光明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香たかく、人の心を淨化致候へども、この頃の文學は動もすれば人の心を醜了致候。青年にして今の小說の作者と主人公と

に感染するものが多くなり候はゞ、日本國の前途は忽ち暗黑になり申すべく候。（新學生訓）

夏目漱石
名は金之助。文學者。（一八六七―一九一六）

六　峠の茶屋

夏目漱石

おいと聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。

五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかりならんで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて

居る。

おいと復聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の上にふくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝく、くゝゝと騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黑な茶釜がかけてある。幸、下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして白から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で

こけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

夏目漱石

床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が日の移るのを知らぬ顏で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子

がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は呑氣に燻つて居る、どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える處が都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。おゝお、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ〳〵と二聲で雞を追下げる。こゝゝと駈出した雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけられて居る。

「御菓子を」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねぎと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね」。

「へえ、御覽の通りの山里で」。

「鶯は鳴くかね」。

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます」。

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい」。

「生憎今日は、――先刻の雨で何處へか逃げました」。

折柄竈のうちがばちく〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嘸御寒かろ」と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板

庇にからんで居る。（鶉籠）

七 あけゆく花

高崎正風
御歌所長。男爵。
（一八四九―一九一三）

春の花を折りてあらし山
ひとりあけゆく花のいろかな

高崎正風

税所敦子
掌侍。
（一八四二―一八九〇）

たつとみし雲雀はきえていとゆふの
かけのみのこる春ぞかなしき

税所敦子

大隈言道
歌人。
（一七八八―一八七二）

なつかしうかをりそめけるはなのかを
また散をのこる春のわかれ

大隈言道

横山由清
國學者。
（一八二七―一八七九）

生ひのふるひとよくてり岩竹を
窓まもりそり軒すゑまで

横山由清

下川邊長流
國學者。
（一六二四―一六八六）

天つほしおちて石ともなりぬまや
ほし河をの巻ふるる年

下川邊長流

伊東祐命
歌人。
（一八四四―一九一九）

菊池幽芳
名は清。
新聞記者。
（一八五三―一）

山里のかきねのしのすすしさも
あふまてなれる月のかをかな

伊東祐命

八　札幌農園

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全なるに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縱横に發揮せられて餘蘊なきに近し。然れども余はこゝに農園の設備を說かんとするものにあらず。余の記さんとする所は唯その風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連なりて、西は遙に札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指してその際涯を知らず。萋々たる牧草、毳の如き處、こゝには彼の林中の雜樹の互に相凌ぎ相排す

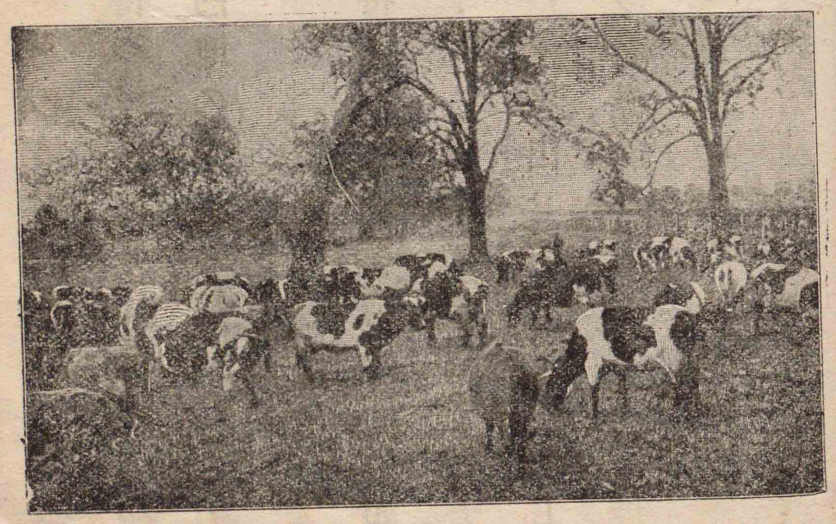
るが如きことなく、廣き空間を占めて處まばらに立てる楡ありて、晝は殘る隈なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるゝものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭々たるその幹は以て百尺の空を磨す。一たび足をこの農園の牧場に入るゝもの、誰か遺憾なく發揮せられたる此の楡の美に驚歎せざらん。

それ廣漠たる平野の緑は既に人の心を快濶ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致を添へ來るを覺えざらん。唯その喬木の種類によつては、またその風致に多少の增減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は松にあらず、杉にあらず、實にその高さと共に深さを有し、深さと共にまたその幅を有するもの、分明に云へばその枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹陰を作る喬木ならざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の森々として青緑の平野に立てる樣を想像せよ。何ぞその畫の如くにして又詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像を回らすことを得たりとせば、

其の人は卽ち遺憾なく札幌農園を其の腦裡に描き得たるなり。

農園が楡によつてその風趣を加ふること斯の如し。然れどもこれなほ靜態に於ける風趣のみ。更に此の間に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。

丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短きエイアシャー種の牛等が、此處に彼處に草を食へる、或はさまよへる、或は尾をふれる、更にうるはしき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づき來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、その關門は



札幌農園

實に斯の如き處なるべし。その繪畫的なる、その詩的なる、又附近の建物と相待つてその米國的なる、少くともこゝに來るものは、內地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。

札幌農園は實に斯の如き特色を有す。余は斯の如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を賀し、又此の學校より往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。（日本海周遊記）

丘淺次郎

九　生存競爭

丘淺次郎
理學博士。東京高等師範學校教授。（一三三八—）

地球上には各種の動植物をして自由に增加せしむべき餘地はない。そこへ各種の動植物が多數の子を生むのであるから、互の間に劇しい競爭の起るは見易い道理ではあるが、其の有樣を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する有樣から考へてかゝらなければならぬ。

動物の中には、獅子・虎・狐・狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子・虎等の餌となるものは矢張草を食ふ動物ゆゑ、動物の食物は、直接にか間接にか必ず植物より取る外

はない。又海産の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな工合で、どれもこれも皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌にするから、此の場合にも動物の食物の根原は矢張植物界にある。斯の如き有様ゆゑ、植物なしには草食動物は生きて居られず、草食動物なしには肉食動物は生きて居られぬ。草を食はなければ生命が保てぬのが草食動

物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初から毎日若干の草を犧牲に供する積りでなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初から若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。草と草食動物と肉食動物とが相並んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは到底出來がたい。

昔、印度の釋迦が山中で難行苦行をして居られる處へ、惡魔が試しに來た話がある。まづ鳩に化けて飛んで來て、「お釋迦様、今鷹が私を捕つて食はうと追つ

かけて來ます。どうぞ憐れと思つてお助け下さい。」といつたので、釋迦はすぐに鳩を懷に入れて隱してやつた。處へ又惡魔がすぐに鷹に化けて飛んで來て、「お釋迦樣、私は久しく物を食はず、非常に腹が減つて居ます。今追つかけて來た鳩を食はなければ、餓死する外はありません。どうぞ憐れと思つて今の鳩を出して下さい。」といつた。そこで、釋迦はどうしたらよからうと思案した後、自分の腿の肉を少し殺ぎ取つて、之を鷹に與へ、遂に兩方を助けられたといふことである。これは、苟も慈悲忍辱を旨とするものは、此の心掛でなければならぬといふ譬で、教訓としては最も妙であるが、實際鳩も鷹も一羽より外に無く、それを僅に一日だけ助けるのなら、此の方法で差支ないが、總ての鳩と總ての鷹とを兩方ともに何時までも助けることは到底出來ぬ。幸、惡魔が再び鳩と鷹とに化けて來なかつたからよかつたやうなものゝ、若し根氣よく此の試しを何回も繰返し、又鳩に化けて來て隱して貰ひ、又鷹に化けて來て腿の肉を殺いでやつたならば、一度に半斤宛としても、十回には五斤となつて、今度は釋迦が死んでしまふ。

又長閑な春の日に、野外に散歩して見ると、草木の青青と茂り、花の美しく咲いて居る處に、蝶が面白さうに飛廻り、小鳥が樂しさうに歌つて居る。詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪にかいて、共に此の世の樂しさをほめたゝへるが、これは極めて皮相な感じて、少し丁寧に考へて見れば、世の中は決してそんなに無事平穩なものではない。鳥がかく歌つて居られるのは今日までに數十萬の蟲を食ひ殺した結果で、歌ひながらも、尙蟲の命を取らうと探して居る。又蝶がかく舞つて居られるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食ひからした結果である。而して彼處の樹の枝には、蝶を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が網を張つて待つて居るし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つて居るから、蝶の命も小鳥の命も殆ど風前の燈の如く、一つ油斷すれば忽ち食ひ殺されてしまふのである。なかなか氣樂に遊んでばかりは居られぬ。動植物は總て斯の如く相殺し相食うて、自然界の平均を保つてゐるのである。（進化論講話）

徳富蘆花
名は健次郎。文學者。（一八六二―）

馬返
日光より中禪寺に至る途にある部落。

一〇　自然の色

徳富蘆花

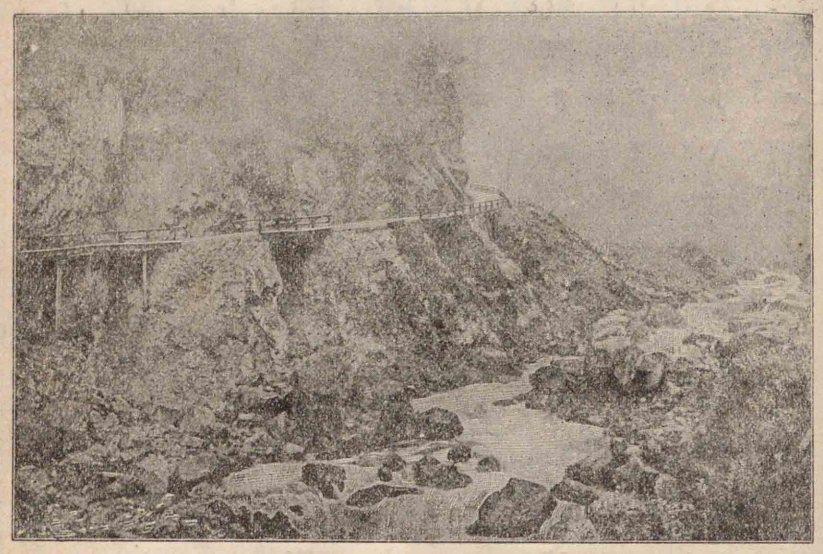
艶麗女性的文
雅文

馬返を出づる頃、雨はら〳〵と落ちしが、間もなく止み、春雲綿の如く此處に卷き、彼處に舒び、其の間より云ふべからざる暖かき匂を含める薄き桔梗色の空を漏しぬ。

路は深澤の峽に入りて、大谷川の水の美言ひ盡し難し。大谷川は川と云はんよりは、寧ろ連續せる飛瀑とも云はん。氷を碎き雪をとかせる清冷の水、此處に到りてまた故の氷雪に復りつゝ、峽より峽に折れ、岩より岩に越え、飛躍して下る。其の一たび躍りて雪を飛ばすや、飛沫は箇箇日光を捉へて金紫の色に輝き、其の落ちて復むら〳〵と涌き上る時、冷艶清美實に云ふべからざる綠青色を帶ぶ。

文―智的の文
情的の文
意的の文

三種の変化を巧に描寫す
大谷川の水の動態が活寫されてゐる
八方の美を四囲の景色も密接
くわしく細かに描く
上帝天下は山水の両者の相まつて
一大美的光景を織成す
三叙景の文と色彩美を味はう



日光大谷川

此等の色は唯眼見るべくして、心已に思ふべからず、況や之を狀するをや。唯巖上に立つて、空

しく水の美を歎ずるのみ。

脚下の水の美なるに見とれて、頭上の山の八汐の盛りを見落すなかれ。

櫻花より濃く薔薇花より薄き紅の色の、若葉の綠に隣り、灰色の枯木に映り、或は春空に襯して峰背に簇立し、或は一樹斜に巖頭にさしかゝり、蒼がちなるは紅深く、やゝ過ぎたるは紅淺く、山の彼處に此處に照り映ゆるを見よ、八汐の美また實に言ひ盡し難し。

たま〳〵男體の巓より降り來る雲の、鵬の如き翼を掩うて山を越え谷を渉る毎に、蔭と光と相追うて走り、彼方の花は蔭に入りて打煙りたる樣にうすれ、此方の花は一樹鮮かに日光にさし出でてちら〳〵と花唇を動かす。

雲の行くまゝに、山と水と花と、光に入り、蔭に入り、笑み、鬱し、變化の妙を極む。（自然と人生）

一一　南洋の興趣

（漢白男性的文　雅俗折衷）

常夏の南國の興趣はどんなものであらうか。まづお笑草に私の腰折から始める。

鱶を追ひ海豚よ逐はゝ、我が船の

私　本文の作者大庭柯公。

今日も亦見つ、スマトラの山。

歐洲行の船が新嘉坡を出て、スマトラの北岸が大陸に迫つて自然の海峽をなして居る長い間を二日に亘つて進航する時の暑さはまた格別である。柴棍のことを亞細亞の小巴里とか、爪哇のことを世界の樂園とかいふのは、西洋人のお世辭でなければ誇張である。あの暑さを考へると、護謨が幾ら儲からうと、果物が如何に旨からうと、南洋の常住は餘り望ましいものではない。只旅行者として或時期を過すには、恐らく南洋ほど多大の興趣を感じる處は他に

なからう。花や葉の飽くまで鮮麗な色彩、驟雨の爽快な氣分、綠陰の涌くが如き涼味などは、南洋旅行者の獨り享受し得べき賜である。

夕立の眞の趣は赤道近き熱帶地方でなければ、實は味はふことが出來ぬ。日本なら、「行水や沛然として夕立す。」位で濟ましてゐられるが、南洋の驟雨と來ては眞の底拔け雨で、雨聲極めて猛烈、下界の何物をも降飛ばして了ふといふほどの豪雨である。支那では哀猿といふ熟字が詩文に用ひられてあるが、これは南方支那から來たもので、驟雨に驚いて啼叫ぶ猿

を云つたものであらう。　南洋の竹は矗立數丈、鬱蒼と茂つて、所謂篁を成して居るが、一旦驟雨が襲つて來ると、親猿も子猿も幾十匹となく、きいくと叫び續けて、竹林を登つたり下つたりする。　五分もたゝぬ間に、今まで盆を覆す程の豪雨がぴたりととまる。同時に猛烈な太陽の直射が、雨に洗はれた青や紅の色の一層鮮かに見える幅の廣い葉に照りつける。二分とたゝぬ間に、路上にも枝にも葉にも、露ほどの雨の跡さへ留めない。

南洋植物の景觀には、蘿葛類の壯觀と綠葉の美觀と

あるが、これに彼の驟雨の襲來するときが、一番壯快であると思ふ。　赤道附近の航海者が、夕立雲の見えるや否や眞裸で、手に石鹼一つ持つて甲板へ飛び出して、待つ間程なく襲ひ來る急雨に、濡ても浴びる氣になつて、頭からシャボンをなすりつけて、手取早く雨浴を濟ますのは、航海者に取つて無上の慰樂だ。

て、天然の一浴を濟ませて、悠々と浴衣でも着ようとする。　と、眼前に開かれて居る瑠璃色の海面を銀の矢のやうに飛んでをる飛魚の愉快げな樣。　誰でも詩情を起さずには居られぬ。

新嘉坡の植物園や、爪哇のボイテンゾルグの植物園などは、旅人の爲に確かな樂園である。動物界からいつても、鰐や毒蛇の害は怖るべきてはあるが、亦天狗猿の鼻の格好に笑を催すこともある。或種の守宮が室内や蚊帳の上に奇聲を發して初旅の者に輕い驚を與へることや、南洋蛙として特色のある牛鳴蛙が、牛のやうな太い聲て水田・河邊に鳴いて居るなども、亦旅中の新興味てある。（「世界を家として」に據る）

三　舟路

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹。文學者。（一八七二―一九四三）

海にして響く艪の聲、
水を擊つ音のよきかな。
大空に雲はたゞよひ、
潮分けて舟は行くなり。
靜かなる空に透かして
青波の深きを見れば、
水底やはても知られず、
流れ藻の浮きつ沈みつ。
綠なす草のかげより
涌出づる泉ならねど、

おのづから滿ち來る潮は
海原のうちに溢れぬ。
さながらに遠き白帆は
群をなす牧場の羊、
吹送る風に飼はれて
わたつみの野邊を行くらん。
雲行けば舟も隨ひ、
舟行けば雲もまた追ふ。
空と水相合ふかなた、
諸共にけふの泊へ。（藤村詩集）

一三　珊瑚礁

山崎直方

山崎直方
理學博士。東京帝國大學理科大學教授。（一八五〇―）

南洋の自然界に於て最も興味あるものとしては、まづ指を珊瑚礁に屈せねばなるまい。珊瑚礁は實に熱帶海洋に於ける一特色である。殊に太平洋に於ては、他の大洋に比して其の數が多い上に、あらゆる種類を網羅してゐる。就中我が占領諸島の如きは其の陸島たると火山島たるとを問はず、何れも之を伴うて居り、殊に多くの島嶼は、島そのものが全體珊瑚礁から出來てゐる。

一體、珊瑚は極めて清澄なる海水を好むものである
が、南洋地方の海水のよく澄渡つて透明なことは又
格別である。波靜かなる礁湖の稍淺い處で覗眼鏡
を用ひて清く暖い水底を窺へば、珊瑚の林が名狀す
べからざる美觀を呈して居るのに驚くであらう。
此等の珊瑚の中には、マドレポラ屬のもの卽ち樹枝
狀のものが、とりわけ多い。此の類の珊瑚は多孔質
で白色のものが普通であるが、中には鮮かな桃色の
ものや、美はしい菫青色のものも交つて居る。珊瑚
の外に種々の藻類、殊に固い石灰質の葉を有する石

灰藻なども少くない。此等の互に生ひ茂つてゐる
有樣は、實に秋の野に八千草の咲亂れた趣がある。
此等の珊瑚の林の中には大きな海鼠が數知れず横
たはつて居るかと思へば、又、青綠紅紫、熱帶の色彩眩
きばかりなる大小の魚族が泳いでゐる。パラウや
マーチャルなどには、長さ三尺にも達する巨大なる
硨磲貝が横たはつて居る。濱の眞砂の飽くまで白
きは、何れも珊瑚の碎けて出來たものであるが、其の
中には又海水中に浮游する微細動物の遺殼も少か
らず雜つて居る。時としては、其の方がはるかに多

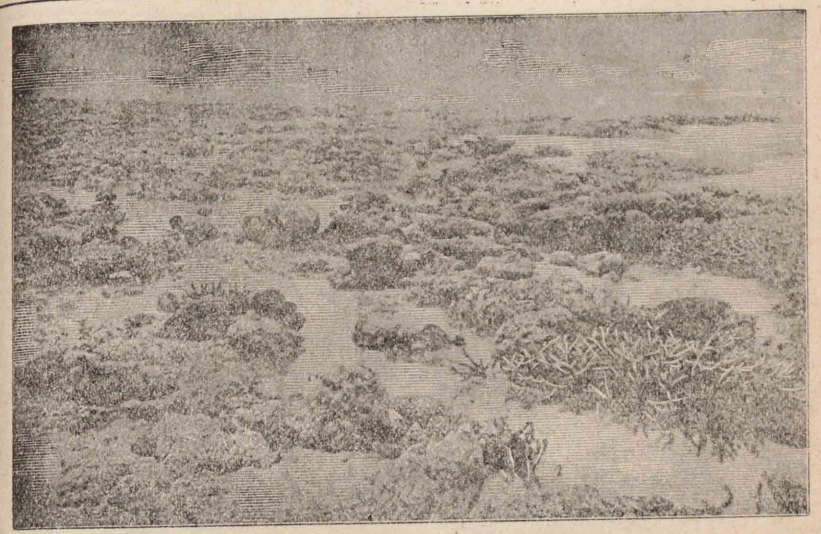
い場合もある。燐礦に名高いアンガウル島の海岸に打上げられてゐる砂の殆ど全部が、罌粟粒大の有孔類の遺殼であつたのには一方ならず驚いた。但し上に述べた珊瑚は彼の珠玉などにするものとは別種類であることは今更いふまでもない。彼の裝飾用のものも稀には發見するが、何分にも少くて、利用するまでには至らない

珊瑚島の上には常に蒼々たる椰子の森を戴いて居る。其の中には特に栽培したものもあるが、多くは自然生である。元來椰子の實は厚い纖維質の果皮

を被つて居るから、よく海流に泛んで遠く漂流することが出來る。偶〻岩に當つても、容易くは毀損せぬ。やがて珊瑚島に打上げられると、始めて根を下して生長する。自然の配劑は誠に巧に出來てをる。

珊瑚島は極めて低い島であるから、椰子の森の方が島そのものゝ海拔よりも高いことが多い。されば珊瑚島の島影が船客の眼に入るのは餘程近距離に來てからである。十浬も離れると最早其の影を見失ふことがある。彼の有名なる世界的航海者のマジェランが始めて太平洋を横斷した時、南太平洋の

マジェラン　葡萄牙の航海家。(1470?-1521)



バウマツ諸島の一珊瑚島に寄つてからは、マリアンナ諸島に來るまで、幾千浬の八重の潮路に、數多ある珊瑚島を一つも認めなかつたのも、畢竟是が爲である。沖合から珊瑚島に近づく時始めて眼に入るのは、水平線上一抹の蒼い線である。更に近づくと、其

の蒼い一文字の下に白い線を見るのみである。いふまでもなく蒼い線は椰子の森で、白い線は水汀に打上げられた珊瑚の砂礫と、其處に寄せては返し、寄せては碎ける磯波とである。此の細く平たい珊瑚島が、或は長く、或は短く、水平線上に點綴してゐる狀は、宛も品川沖の臺場を遠くから見るやうである。更に諦視すれば、此の磯波の白筋は獨り島の岸邊に碎けて見えるばかりでなく、島を離れて其の左右若干距離に亙つて續いてゐる。時としてはこれが次の島まで連なつてゐることもある。かく波浪の激

するは、即ち水面近くに珊瑚礁脈の横たはつてゐることを示すものである。（我が南洋）

一四　武士氣質

新井白石

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸りて、搦手より攻入るべき由の仰承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼ぎて馳下る。

白河より白石に至る間は、皆敵の中なれば、道塞がりぬ。常陸國を廻りて磐城相馬にさし掛つて國に歸らんとするに、相馬また累代の敵國なり、恙なく通らんこと叶ふべからず。然るに政宗は僅に五十騎許引具して、常陸國を經て相馬の境に至り、まづ相馬が許に使者を立て、「此の度德川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境に到り候ひぬ。餘りに道を早めて打ちし程に、士卒悉く疲れぬ。願はくは城下に旅館點じて賜はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。」と言はせたり。長門守義胤是を聞いて、「あつぱれ、運の盡きぬる奴ばらかな。たゞにても伊達は相馬が年來の敵

白河　磐城國西白河郡白河町。
白石　磐城國刈田郡白石町。
相馬　磐城國相馬郡中村。相馬氏の所領。
長門守義胤　相馬義胤（三二ページ—三六ページ）

なり。ましてや味方討ちたらん一方の大將承るといふものを。いてく今宵一夜討して、案内知らぬ者どもを此處彼處に追詰めて、一人も殘さず討取つて、年來の仇に報い、此の度の賞に預らばや。」とて、頓て民家をしつらひて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の様をぞ議したりける。

爰に水谷三郎兵衛尉某、遙に末座より進み出て、「末座の意見恐れ入つて候へど、既に會議の座に列つて候上は、心に存ずる所を申さゞらんは其の詮なし。抑〔窮鳥懷に入る時は獵者も之を殺さず〕とこそ承れ。

駒が峰　磐城國相馬郡駒嶺村。

政宗程の大名が既に年來の怨を棄て、君を賴みて來れるを、たばかつて闇々と討たんは勇者の本意とする所にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり。又我が城を去つて彼の國の境駒が峰に到らんこと、行程僅に三里。けふの日いまだ未の時に下らず。政宗おのが境に到らんとだに思はゞ、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅の勢を以て此處に止まること、豈深き謀計あらざらんや。只同じくは我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、まづ此の度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して勝負を兩家の

天運に任せらるべうもや候はん」と申しければ、滿座の輩皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に糧料・魚鹽・秣・糠・藁に至る迄積み置きて、夜に入りては四面に篝火を焚かせ、共に夜を巡らせ、警衛心を盡してけり。

義胤が士どもも、政宗が餘りに取鎭めたる體を見て、「憎し、いざ彼が振舞を試みん」とて、夜更けて馬一二匹、切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騷ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出て、「相馬殿の御人や候、御人や候」と言ひし時、「さむらふ」とて參りければ、「物音高う候。何事にや。政宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎭めてたべ」とて、又內にぞ入りにける。かくて夜明けゝれども立ちもやらず。巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使して一禮し、靜かに馬を打つて行く。竊に人をつけて見せたるに、彼の國境の駒が峰のあなたに、伊達の軍勢雲霞の如く充ち滿ちて出て迎へぬ。

かくて關が原の合戰終り、天下悉く平ぎて、相馬既に所帶を沒收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗、德川殿に度々歎き奉りしかば、其の事となく、年月を經て

後本領をぞ賜うたりける。此の時より、かの家年毎の評定始には、滿座の輩一々に水谷が子孫の座の前に進み寄り、「水谷殿の御意見違ふ事あるべからず。」と色代して罷出づる事、長き佳例となりにけり。（潛翰譜）

一五　閉塞隊　その一

閉塞隊　明治三十七年五月一日決行せられたる第三回旅順閉塞隊。午前二時　明治三十七年五月三日。

我が閉塞船收容艇隊が狂風と爭ひ、激浪と戰ひつゝ旅順口外を漂遊せる間に、時は移つて午前二時となりたるに、閉塞船は未だ其の姿を現さず。中止となりしにやなど思ひ居るうち、忽ち黃金山砲臺より發砲せり。かくて血よりも赤き一發の火光鋭く暗中に閃くと同時に、轟然たる砲聲山海にどよめき、附近の海岸砲臺亦之に和して五發、六發、七發續けさまに打出せり。さては愈〻豫定の行動ぞと、急ぎ受持區域に就く。眸を凝らして港口を眺むれど、それぞと思ふ船も見えず、彈丸の行方はた知るに由なし。射擊の目標はそも何物ぞ。やがて砲擊は益〻急に、砲聲は愈〻烈し。暗黑の海岸は眞紅の砲火に飾られ、探照燈の旋轉は一層の急を加ふ。艇の動搖をも、手足の痛みをも今は全く打忘れ、暫し茫然として此の壯烈な

る光景に見惚るゝ折柄、港口に方りて二三の水雷艇らしきものゝ電光を潛りて縱横に馳突するを發見せり。中にも一葉の水雷艇は敵彈に傷つきしにや、熾に蒸氣を噴出しつゝ、敵探照の下に猛擊せられつつあり。是、閉塞隊前衞の任務を有せる第十四艇隊が港口偵察を行へるなりけり。

かくて砲擊約十分ばかりにして、水雷艇は何れも探照界を退けるものゝ如く、其の姿を闇に沒すると共に、敵の砲火も亦歇みぬ。やがて閉塞隊は來らんと、我等の艇隊は圓陣を畫きつゝ哨區の警戒を續けたり。仰ぎ見れば六萬燭光の大探照燈は爛々たる光輝を海面に放ち、時々我等を照し出す。その明るさ、縫針の穴さへ明かに見ゆるばかりなり。探照燈の周圍には幾多の敵砲臺あり、發砲の電流一たび之に通ずれば、艇も人も唯一發の彈丸に粉碎せらるゝなり。探照燈の旋り來りて我等を照す毎に、今や打つ、今や中ると、默然として死を待てる心の中、彈雨を冒して突擊するは物ならず。

風は少しも其の力を緩めず、敵の警戒は益嚴を加へつ。中央二基の探海燈は港口を挾みて十字照線を

作り、左右の二基は旋動して頻りに餌を探れり。時進みて午前二時三十分となるや一隻の閉塞船忽焉として敵の探照界に現れつ。是ぞ匝瑳大尉の指揮せる三河丸なりける。城頭山砲臺まづ砲火を開きて之を邀へ、饅頭山蠻子營・威遠・黄金山・夾板嘴・嶗嶝等の永久砲臺を始とし、

匝瑳大尉
海軍大尉匝瑳胤次。

閉塞隊の突擊

港口兩岸に布列せる大小幾多の臨時砲臺之に和し、一齊に砲擊を開始せり。殷々たる砲聲は百雷の一下するが如く、狂風も怒濤も爲に其の聲を奪はれ、眞紅の砲火は點々として高く低く暗中に閃き、紫電紅焰交、相映射す。その凄慘の狀、口舌のよく盡す所にあらず。

さて三河丸は如何にと顧みれば、其の痩せたる煙突より、どす黑き煤煙を强風に靡かせつゝ降來る飛彈を物ともせず、港口指して一直線に突進しつゝあり。城頭山探照燈は船の眞横を照して寸時も離れず、墨

繪の如き船影は青白き電光の裡に物凄く畫き出されつ。煙突細く、檣小さく、加之速力遲々として船首に波をもえ揚げぬ風情は、屠所の羊の一入哀れなり。船の周圍には大小の彈丸落下して、水煙沸々、銀柱林立、時に全く船影を蔽ふことあり。其の砲擊の激烈なる、最早船内に一人の生者もあるまじとまで思はれたり。されど船は尙依然として前進を續け、遂に港口附近に達しぬ。

一六 閉塞隊 その二

此の時、又數隻の閉塞船は一團となりて、敵の探照界に現れたり。敵砲火の大部分は今や此の新なる餌食に向ひぬ。先に港口に進みたる三河丸は今や正に爆沈を果したるものゝ如く、合圖の火箭を高く中空に放てり。踵いで二三の閉塞隊は斷續して更に又港外に現れたり。敵の射擊は益〻急を加ふ。大は二十八珊の榴彈砲より、小は二听・三听の輕砲に至るまで、幾百門の砲口より打出す大小の砲彈は雨より繁く、船側に碎けては紅焰迸發、暗中に閃き、海面を打ちては水柱三丈、電光に輝く。砲聲は轟々として大

海にどよめき、砲火は閃々として暗空に瞬き、滿庭の紅花咲きては散り、散りては咲くに異ならず。正に是、滿山のイルミネーションなり。

此の時探照燈に照され居たる我が閉塞船は其の數總て六隻。前なるは既に港口に近く、後なるは獅城頭山下に在り。四基の探照燈は交、之を照して、海面の明かなること白晝を欺き、各船の狀況は歷々として指點すべし。檣の折れたるもの、煙突の碎けたるもの、白煙を噴出せるもの、船體の既に半ば沈沒せるものなど、苦戰の程思ひやらる。折しも四番目に進

犬塚大尉 海軍大尉犬塚太郎。

向大尉 海軍大尉向菊太郎。

みたる一船は忽ち猛烈なる水煙に包まれ、見る間に其の姿を水面より沒したり。是、犬塚大尉の指揮せる愛國丸が敵の水雷に罹れるなり。かくて殘れる五隻の閉塞船は猛烈なる敵彈を冒して悉く港口に達し、相前後して爆沈の火箭を揚げたり。時正に午前三時半なりき。

時に鮮生角方面に方り、一隻の閉塞船突如として嶗崖嘴の探照界に現れ、群を離れし濱千鳥の友を追ふが如く、捷路を執りて港口に向ひ驀進したり。これぞ向大尉の指揮せる朝顏丸なりける。纔に緩まん

とせし敵の砲擊は茲に再び激烈となり、其の全砲火は殆ど此の一船に集中せり。朝顏丸は我が艇隊と敵壘との中間を眞一文字に突過したれば、我が隊との距離は僅に一海里に過ぎず、從つて船中に命中する敵彈は手に取る如く見ゆ。忽ちの間に船側に爆裂したるもの無慮十餘發を算ふ。殘酷、無情、殆ど見るに忍びず。全身の血は煮え返つて、覺えず切齒扼腕せり。と見れば船の後部は已に半ば沈みて、速力著しく減じたり。而も煙突よりは盛に黑煙を吐きて尙も死地に向ひて急ぎつゝあり。嗚呼乘員は人

本田少佐 海軍少佐本田親民。
高柳大尉 海軍大尉高柳直夫。
白石大尉 海軍大尉白石葭江。
湯淺大尉 海軍大尉湯淺竹次郎。

か、はた神か、實に是、日本魂の精なりけり。敵は少しも砲擊の手を緩めず、流彈は頻に我等の附近に飛び來れり。かくて朝顏丸は遂に港口に達するを得ずして黃金山の南方斷崖下に沈沒しぬ。時は凡そ午前四時なりき。

後、聞く所によれば、此の夜突入を決行したる閉塞船は前記三河丸、愛國丸の外、本田少佐の指揮せる遠江丸、高柳大尉の指揮せる小樽丸、白石大尉の指揮せる佐倉丸及び湯淺大尉の指揮せる相模丸都合八隻にして、乘員合計百五十八名、その中我が收容隊に救は

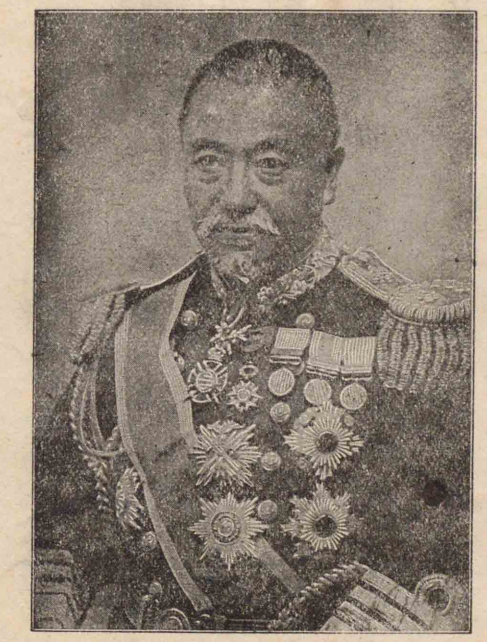
れし者は僅に六十七名に過ぎず。殘れる九十一名は彈丸に碎かれ、怒濤に呑まれて全く行方不明となりたり。殊に哀れなるは朝顏丸・小樽丸・佐倉丸・相模丸の四隻にして、乘員中一人の生還者だになかりきとぞ。

狂瀾怒濤を冒して決行せられたる第三回旅順口閉塞は、其の行動斯の如く壯烈に、其の結果斯の如く悲慘なるものなりき。帝國海軍は之を以て後世に對する誇となすと共に、國民は忠勇義烈なる此の犧牲者に對して深く敬意と感謝とを表せざるべからざるなり。（「戰影」に據る）

一七　旅順艦隊全滅公報

武勇絕倫ナル攻圍軍ノ猛烈不撓ノ攻擊ニ因リ、旅順口ノ死命ヲ制スベキ二百三高地ガ我ガ軍ノ有ニ歸セシヨリ、港內敵艦隊ニ對シ、攻城重砲ノ擲射益〻ソノ威力ヲ逞シウシ、ポルタワ・レトヴィザンハ忽チ沈沒シ、ポペーダ・ペレスウェート・パルラダ・バヤーン相次イデ擊沈セラレ、獨リセバストポリノミ、去ル九日朝、背面ヨリノ砲火ヲ逃レテ港外城頭山下ニ逸シ碇泊

セシモ、是亦我ガ水雷艇隊ノ連續果敢ナル襲擊ニ傷ツキ、今ヤ殆ド全ク戰鬪航海力ヲ失フニ至レリ。旅順敵艦ノ主力ハ事實上茲ニ全ク滅亡ニ歸シ、只殘存セルモノハ、無勢力ナル砲艦オトワーズヌイ及ビ驅逐艦數隻ニ過ギズ。



東鄕平八郎

此ニ於テ聯合艦隊ハ去ル五月一日以來强行シタル封鎖配備中不必要ナル一部ヲ撤スルト同時ニ、益〻旅順口及ビ港外ヨリノ破封鎖船ノ監視ヲ密ニシ、且殘存ノ敵艦艇ニ對スル警戒ヲ嚴ニセントス。

此ノ長日月ノ封鎖戰中、敵ノ敷設及ビ浮動水雷ノ危害、風濤濃霧ノ險難等常ニ絕エズ。前ニ宮古・吉野・初瀨及ビ海門ノ災厄アリ、後ニ平遠・濟遠ノ遭難起リ、忠死ノ將卒亦少キニ非ズト雖モ、幸ニシテ始終封鎖ヲ維持スルコトヲ得、時ニ敵ノ脫出スルコトアリシモ每々ソノ企圖ヲ破リ、終ニ攻圍軍ノ至大ナル協力ニ因リ、茲ニ殆ド當方面敵艦隊全滅ノ成果ヲ見ルニ及

ビ、又浦鹽方面ノ敵艦隊モ常ニ我ガ第二艦隊ノ爲ニ大打擊ヲ受ケテ、爾後再ビ出動スルノ氣勢ナキニ至リ、只益大元帥陛下御威德ノ及ブトコロノ洪大ナルヲ感激スルノ外ナキナリ。

而シテコノ間、又麾下諸部隊ノ各ソノ能力ニ應ジテソノ任務ヲ遂行シ得タルノミナラズ、死ヲ決シテ敵港ヲ閉塞シタル閉塞船隊、連續倦マズシテ敵前ニ機械水雷ヲ沈置シタル艦艇、危險ヲ冒シテ敵海ノ掃除ニ從事シタル特別掃海隊、並ニ敵彈ニ暴露シテ敵艦ヲ監視シタル前進望樓員等ノ特別勤務ガ、當方面ノ

封鎖戰ニ至大ノ效力アリシコトヲ具報スルハ、本職ノ上下ニ對スル職責ト信ズル所ナリ。（官報）

本職 聯合艦隊司令長官海軍大將東鄕平八郎。

一八　太刀奉獻記　その一

あはれ此の日頃夢寐にも忘れ兼ねたる白耳義皇帝陛下の御姿を今まのあたり見上げ參らせたる嬉しさよ。　陛下は紅の緣細うついたる濃紺の戰時服に、長靴を召され、帽も被らせられず、劍も佩かせられず、勳章・綬章の類も何一つ着けさせられて居らぬ。　御身の長、六尺に餘り、眉目淸秀、威あつて猛からず、何處

やらに人を懷かしむる所がある。寫眞などで伺ふと、色の飽くまで白い、眼つきの鋭い方とのみ拜せられたが、長い間軍旅の間に奔走せられた爲、御顏は日に燒けて色渥丹の如く、御髮も櫛の跡を留めて居らぬ。柔和な御眼ざしに極めて慇懃な御擧止、想像と實際とは著しい違てある。

白耳義國皇帝アルベール陛下

これが三軍を叱咤して暴戾な獨

山中代理公使　名は千之。白耳義公使館二等書記官。代理公使。

僕　本文の作者杉村廣太郎。ハートグローヴ　ロンドンタイムス記者。

軍を喰止めた勇名赫々たる陛下とは思はれぬ位。まづは意外の感に打たれた。

侍從武官の紹介で、陛下はまづ山中代理公使と手を握らせられる。自分の捧げた祝電が英文であつた爲か、初からすべて英語でお話になつた。山中君から更に僕とハートグローヴ君とを引合せて、順々に握手を賜はつて、「遠い所を御苦勞」などいふやうな御挨拶がある。是が終つて後、山中君の注意で、僕は太刀捧呈の辭を讀上げることになつた。其の文に曰く、

今日　大正四年一月三十日。

白耳義皇帝陛下。

陛下よ。

余は今日陛下より謁見を賜はれる至大の光榮を感謝し、茲に恭しく日本東京大阪朝日新聞社長村山龍平に代りて太刀一口を奉獻し、陛下の受納あらせ給はんことを希ひ奉る。

昨年十一月十五日、余が陛下に上れる電報の中に奏上せるが如く、余は日本擧國の民が陛下及び陛下の忠勇なる臣民の武勇と剛毅とに對して絶大なる欽仰の念を傾け、且陛下並に白國民が世界の

如何なる國民も未だ曾て遭遇せしことなき最も峻厲なる試錬の下に、自若として人道及び文明の爲に致せる勤勞に對し、甚深なる衷心の感謝を懷抱せることを再び確言するを許容し給はんことを願ふ。

龍平が、日本武士の魂たる此の太刀を陛下に捧呈して、恐れ多くも陛下の御嘉納あらせたまはんことを希ふ所以のものは、是、實に勇名遍く全世界を驚倒せる西歐の武勇なる一國に對する、日本國民の極めて熱烈なる讃歎の情を表明せんとの微衷

に外ならず。

此の日本刀は、龍平氏が其の蒐集せる美術品より選擇したるものにして、其の刀身は千五百七十七年、西部日本備前長船の住人中川七郎右衞門尉行包の鍛造する所に係る。彼は千五百八十八年に逝去せるが、其の生國備前の地は、名刀製作の巨匠を出せるを以て名あり。

陛下よ。余は重ねて陛下に對し、陛下が辱くも親しく謁を余に賜ひ、此の捧呈の品を嘉納し給へる優渥なる聖旨に對し、滿腔の謝意を言上するを許し給はんことを希ふ。

千九百十五年一月三十日　朝日新聞特使　杉村廣太郎

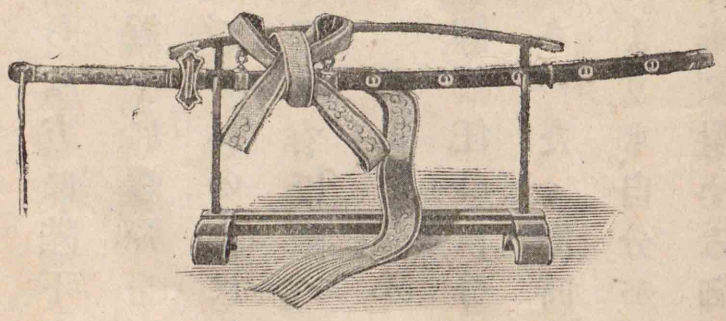
僕がおどく〳〵と之を讀終ると、今度は陛下の御答禮があつた。御聲は低かつたが、力は籠つて居た。遠い〳〵日本の國民から斯の如き同情の表章を受くることは、陛下の最も意外とし、且最も感謝せらる所なる由を語られ、此の意を朝日の村山社長に能く傳へよとの御意であつた。

一九　太刀奉獻記 その二

かく仰せられて後、陛下は山中公使の御案内で、太刀を飾つて置いた卓子の側に寄られる。自分は函から取出して、陛下の前に捧げた。陛下は刀の装飾に深く御目を止められ、鞘の上なる鶴の丸の紋の綺麗に列んだ處をちよと指先で押へられながら、「誠に美術的だ。」と、御感に堪へぬもの、如く仰せられた。それから「中身を拔いて見せよ。」との仰がある。自分は仰に任せて半ば劍を拔いてお見せ申す。陛下を始め、侍從武官も山中君もハ君も皆首をさし伸べて、句美はしい白刃に見入る。

一座肅然。

僕は此の時、陛下の御前に劍を拔くことの光榮をしみじみと感じた。それ陛下の御生命には畏多いことながら賞が懸つて居る。陛下を擒にし奉るか、あや



奉獻の太刀　（東京朝日新聞に據る）

め奉るかは、獨逸の手をかへ品をかへて試みた處で、自動車の御者に旨を含めて、あらぬ方に陛下を誘ひ奉らうとした事も、陛下の御身近くに爆彈を投げ、砲擊を加へた事も、屢、あつた。　氣づかひの上に氣づかひを加ふべき其の陛下の御前に、鐵なほ斷つべき太刀の刃を、見ず知らずの極東の一外人に拔かせて何等御懸念あらせられぬ陛下の御信任は、自分の言ひ知れず感謝の念に堪へぬ所であつた。　同時に是は自分に對する御信任といはんよりも、自分が代表する朝日新聞社、大きく言へば日本に對する御信任と

見た。　日本帝國の臣民だから、萬間違はあるまいとの御安心があつたに相違ない。　さうすると、自分は微力ながら、少くとも、今此のアルベール陛下の御前では日本を代表してゐるのだといふ重々しい氣分になる。

一同一語もなく刀の刃に見入つた時、神經が不思議に緊張して、思ひもよらぬ事が考へ出される。　かうして五人が立つて居る中へ、突然遠距離から打出した獨逸の重砲彈が飛んで來て、五人の身に大した怪我のない程度に於て、轟然と此の室内で炸裂するや

うなことがあつたら、如何に此の謁見記に光彩を添へるだらうかなどと思つた。或は又、刀に見入つて我を忘れた五人の後から、忽然として何處からともなく暴漢が現れて、あはや陛下に一刀切りつけようとするところを、僕が有りあはせの此の太刀で、拔く手も見せず其の暴漢を斬つて捨てたりなんかしたら、愈、以て此の謁見は劇的になるだらうものをなどとも思つた。

太刀を元の鞘に收めて、陛下は二三歩後に退かれて、これより色々の御物語が始まる。

感に堪へ兼ねさせられたやうな面持して劍の側を離れさせられた陛下は、更に僕に向つて、「村山氏は平生此の種の美術骨董品を蒐集して居るか。」との御尋がある。「然り、陛下よ。」と自分は答へる。生れてから始めて陛下といふ言葉を二人稱につかつた僕は、何やら身にそぐはぬ心地がして落着かない。我ながらまづい發音の仕方だと思ひながら、それでも一寸現實を離れたやうな氣がして嬉しかつた。陛下は語を繼いで、「日本は其の初め美術に於て秀でた國とのみ知られて居たが、其の後、美術のみならず學術に

於ても、工藝に於ても、又軍事に於ても、何一つ秀でぬものゝないことを世界に知らしめた。　朕は平生旅行好で、各處に旅行を試みたが、日本のみはまだ之を訪ふ機會を得ない。　さりながら、朕は從來讀みもし聞きもした所に依つて、日本が驚異すべき國であることを知つて居る。」などと、しみ〴〵と仰せられる。「戰のやんだ曉、陛下が日本にお出で遊ばされんことを切に希ひ奉る。」と申せば、「朕も何時かさやうな折のあることを望んでゐる。」と言葉靜かにのたまふ。

日清・日露の兩戰役に於ける日本海陸軍の活動が話題となつて、陛下は日本軍人の勇敢と節制とを稱へ給うた後、轉じて日本赤十字社の組織の完備してゐることに說き及される。　山中公使は、日本赤十字社の看護婦が今回の戰に當り、露佛英三國に派遣せらるゝに至つた次第を語り、僕は、英吉利の方の一行が既に倫敦に着いて、近日サウサムプトンなるネットレー病院に入ることになつてゐる由を言上すると、「さうか、さうか。」と陛下は興ありげに肯かせられる。

かくて三十分ばかり樣々の御物語があつて後、陛下は「村山社長並に朝日を通じて日本國民に余が衷心

の謝意を傳へくれよ」と仰せられ、又、僕等三人に一々握手を賜はつて、侍從武官と共に此處を出られた。さしも重荷であつた太刀の獻上も首尾よく終つて、僕等は喜び勇んで其の儘ダンケルクに引返した。日が途中で暮れた。（「戰に使して」に據る）

ダンケルク　佛國ノード州の海港。白耳義の國境に接す。

二〇　昇仙峽

徳富蘆花

工場汽笛の響に眼ざめて、東京に居るにやとふと疑ひしが、顔を洗うて欄によれば、天邊の高峰雪を帶びて、山國の氣味眉に薄り候。

今日は昇仙峽を見る積にて、市のはづれまで車、それより昨日の疲れ足曳きずりて石ころ路を上り候。

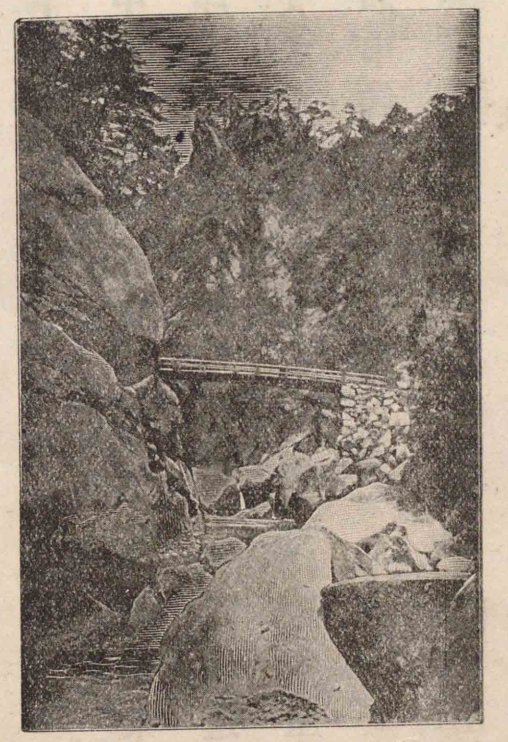
甲府より約二里にして、天神森の茶屋あり　西洋人犬を連れ、銃を肩にして、「此の邊に雉子が居ますか」と、見事なる日本語にて茶屋の老婆に尋ね申候。

茶屋を出でて程なく荒川の滸に出づ。これより一里半ばかりが即ち御嶽新道の奇勝昇仙峽に候。此の新道は御嶽の麓猪狩村の農長田圓

市　甲府市。

右衞門と云へるが、文化より天保にかけ、自ら資を捐てゝ、單身三十七年の星霜を費して作り上げたるものゝ由に候。

昇仙峽の妙は水にあり。水晶を産する金峰山より出づる水なればにや、清きこと眞に水晶の如く、仙娥瀑となつては一點の汚なき雪をたぎらし、一枚岩を走りては透明無色水無きが如く、潭と淀みては黃葉の影を明かに數仞の底に鋪き、眞に清洌を極め候。昇仙峽の奇は石にあり。石は皆花崗石、薄紫の色をなして磊々として家の如く、巨大なる卵の如く、水中に横たはり、或は危く道にさしかゝりて石門を作り、或は一峰盡く此の石を疊んで累々矗立せる覺圓峰の如きを作り候。而して楓はなければ、黃葉錦の如く其の間を點綴す。清奇の二字は昇仙峽を道ひ盡し候。



昇仙峽

仙娥瀑を過ぎ、小隧道を過ぐれば、卽ち猪狩村。半里にして御嶽山金櫻神社あり。甲府より此處まで四里に近し。日猶高けれどいたく疲れたれば、とある宿につきて名物の蕎麥を喫し、國産の葡萄酒一杯を傾けて昏々として睡に落ち申候。（青蘆集）

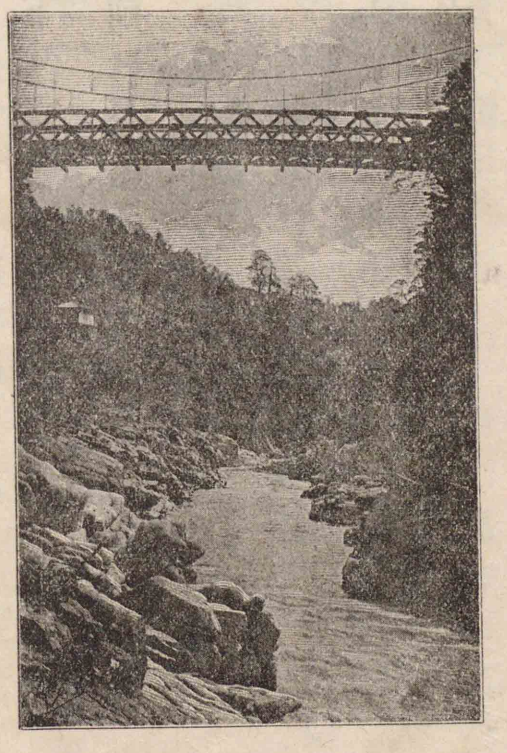
二一　天龍川

大和田建樹

みすゞかる信濃路出でて、
參河の岸うち洗ひ、
遠江に走り流るゝ
天龍は國のはや川。
眞下りに船さしくれば、
前に見し千尋の岩は
見るがうちに舳掠めて、
忽ちに後にさかりぬ。
さかさまに走りゆく山、
立ちながら躍りゆく松、
しばらくも舟は止らず、
時のまも岸はやすまず。

大和田建樹
文學者。
（一八五九—一九〇〇）

あはれ此の岩きる水に
舟の道たれつけそめて、



天龍峡

陸ゆかば三日ゆく路を
一日にて下し初めけん。

佐々木信綱
文學博士。
（一八六二—）

川上の諏訪の湖、
川下の遠江灘、
よそならて、呼ばゝ答へん、
艫に、へさきに。（深山櫻）

二一　松坂の一夜

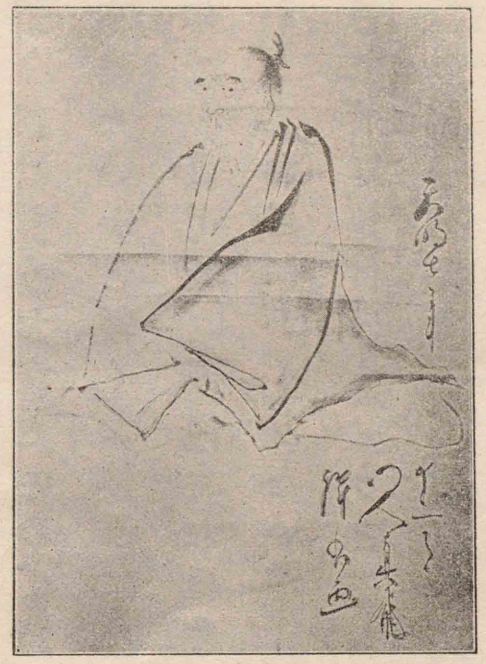
佐々木信綱

時は夏の半、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひ連れゆく御伊勢參りの群も、春先ほどには騒がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に「御免」といつて腰をかけたのは本居舜庵と云ふ魚

町の年の若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものゝ、名を宣長といつて、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふ此の店の得意であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて「あゝ殘念なことをしなされた。あなたがよく名前を言つておいてになる江戸の岡部先生が、今の先若いお弟子と供を連れてお立寄になつたに」と言ふ。舞庵は、いつものゆつくりした調子とは違つて、「先生がどうして此處へ」と、あわたゞしく問ふ。主人は「何でも田安樣の御用で山城から大和とお廻りになつて、歸りに參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留、今朝はもうお宜しいので御出立の途中、何か古い本はないかと暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました」。舞庵「それは殘念なことである、どうかしてお目にかゝりたいが」。「跡を追うてお出でなされませ、追付けませう」と主人がいふので、舞庵は一行の樣子を大急ぎで聞取つて、跡を追うた。

湊町・平生町・愛宕町を通り過ぎ、松坂の市街を離れて次の宿なる垣鼻村のさきまで行つたが、どうもそれ

らしい人に追ひつき得なかつたので、すご〳〵と我が家に戻つて來た。



賀茂眞淵（竹柏園藏）

數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂の本陣新上屋に宿つた。「若し歸りにまた泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」と賴んでおいた舜庵は、夜に入つて

新上屋からの使を得た。樹敬寺の塔頭なる嶺松院の歌會に往つて今しも歸つて來た彼は、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春鄕は二十五、その弟の春海は十八の若盛で、早くも別室にくつろいでゐた。衞士はほの暗い行燈の下に於て舜庵を引見した。

本居宣長（本居氏藏）

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は當年六十七歳、その大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師としてその名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれど頰豐かなるこの老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年。しかも彼は二十三歳にして京都に遊學して、醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなくて、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深

有德公　八代將軍德川吉宗。（一六八四―一七五一）

かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、かねて志してゐる古事記の註釋に就いて其の計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聞いて懇にその意見を語つた。「我も固より神典を解き明らめんの志はあつたが、それにはまづ漢意を淸く離れて古のまことの意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言を得た上でなければならぬ。古の言を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それゆゑ自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、かく

も年老いて、殘の齡いくばくもなくなつてしまつた。御身は年盛りて、ゆくさきが長いから、怠らず勉めさへすれば必ず成し遂げられるであらう。しかし、世の學に志す者は、とかく低いところを經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬのである。此の旨を忘れず心にしめて、まづ低いところをよく固めて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けやすく、家々の門の皆とざされ果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした

村田傳藏 坂大學の通稱。眞淵の門人。國學者。

若人は、さらでも今朝から曇り日の闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家のくゞり戸を這入つた。隣家なる桶利の主人は律義者で、いつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとんく〳〵と桶の箍をいれてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵はその後江戸に便を求め、翌十四年の正月、村田傳藏が中にはいつて名簿を捧げ、うけひごとをして縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾

來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とはいへ、その相會うたことは纔に一度、たゞ一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈の光はかく相語つた老學者と若人とを照した。しかも其のほの暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。（賀茂眞淵と本居宣長）

中邨秋香

國學者。（一三〇一―一三八〇）

二三　歌話

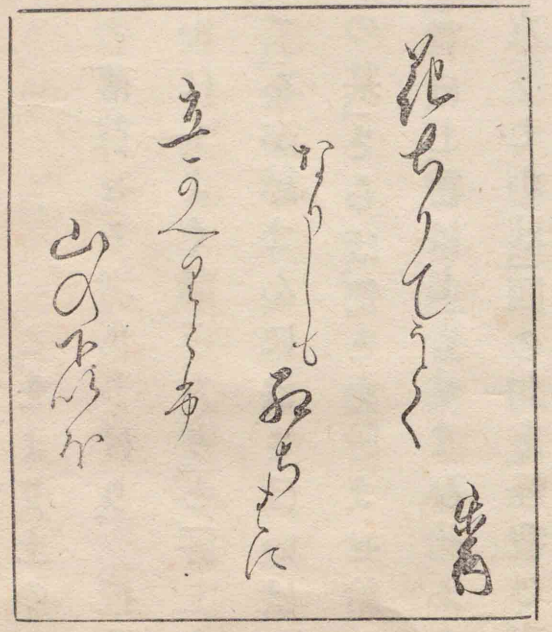
中邨秋香

白河樂翁公

名は定信。關安宗武の第七子、後出で白河の城主松平定邦の嗣となる。（一三一八―一三八九）

とりゐ坂

白河樂翁公年十二にて猶田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類燒しけり。大火といふまでにもあらざりしかど、燒死せしもの多かりし



白河樂翁公筆蹟（東京村松氏藏）

かば、

この火事は人の命をとりる坂、

こをより上のとゞはかいぜん。

と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まんにはさはいはじ」とありければ、奥醫師の某、「さらば、何とか詠ませ給ふ」と問ひまゐらするに、「言はじ、言はじ」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を「怪我の事なり」といふべきなり」とあり。即ち

この火事は人の命をとりる坂、

怪我のことなり、とゞもかいぜん。

となり一句のことにて、一首の意味を全く顚倒せしめ、過の已み難きに出づるを明かにせられしこと、まことに栴檀の雙葉とぞいふべき。

あがたの宿

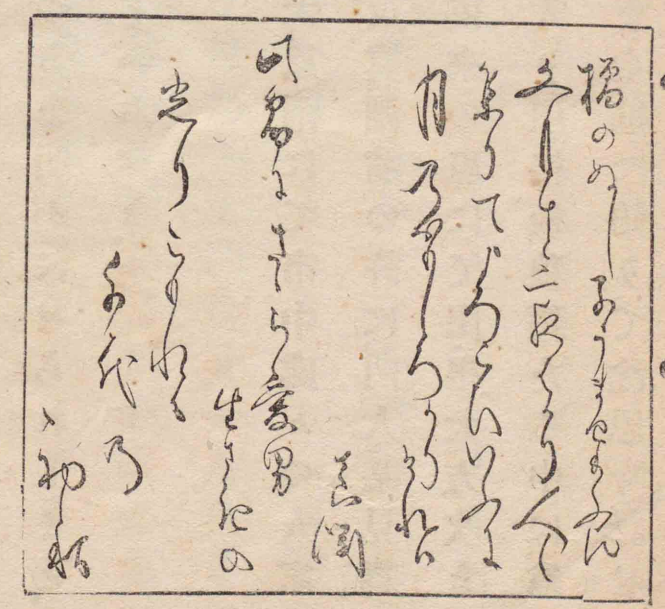
延享某の年の秋、江戸大風雨にて市中處々の人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許に、門人某見舞に行きけるに、翁の家も夜來の風にて屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机に凭りて沈思吟詠せり。

筆蹟 横のぬし子うませ給ふに文月十三夜はかり人々集りてよろこひいふに月のおもしろかりけれは　眞淵

此宿にさゝらえ男生きの光りこもれる　平代の初秋

「烈しき風雨にも候ひしかな。」といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧みて會釋しつゝ餘談に及ばず、「此の嵐にて一首出て來ぬ。」とて、書きて示しける歌。

野分してはがゝの宿はあれまけり、
月見に來よと誰にはまし。



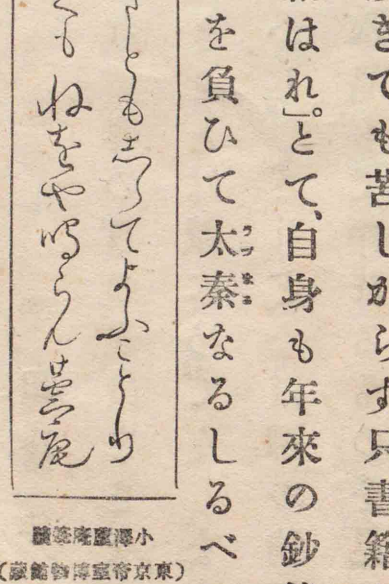
賀茂眞淵筆蹟（東京帝室博物館藏）

小澤蘆庵 歌人。（一七二七—一八〇四）

太秦 京都の西郊にあり。

燒野の原

天明の火災にて小澤蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告げて、「他の品は皆燒きても苦しからず、只書籍だけは一冊も多く出し給はれ。」とて、自身も年來の鈔錄本を風呂敷包にし、これを負ひて太秦なるしるべの家に避けぬ。この火にて内裏の炎上せしよしを聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の燒跡を拜し奉りて、



小澤蘆庵筆蹟（東京帝室博物館藏）

今朝見をバ燒野の原とかりにゝり、
　　されや昨日は玉しきの庭。（新說歌がたり）

二四　秋の夜

幸田露伴

幸田露伴
名は成行。文學博士。（一八六七―一九四七）

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光はをさなき童の髮の如し。めでたきことは誠にめでたし、なつかしきことも誠になつかし。されど、なほ聊か物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。清さは餘りありて味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなるが、海原の果より、松の樹の間より、又は市中の甍の浪間より出てたる、目ざましく心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれど、たゞ我が魂の世に浮かるゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身にしみ入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日・六日の月の、ふと見る夕暮の空に出て居りて、雜木の梢、もろこしの垂葉などに風かすけく呼く、まつおもしろし。遠山黑く暮れて、素月、輝を揚げ、庭樹のそれ〴〵潤葉・纖葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽凉清澄の景を釀し

出すさま、いづくにも有りふれたることながら好し。夜更け、蟲吟じて、世の中靜かなる時、たまく燈前に書をさし置きて、起つて廊を歩むをりから、窓の白きを看て戸を排きて出づれば、月天心を過ぎて光華六合に瀰り、霜に澄める夜の氣は水まさに凍らんと欲するが如くなる、身心頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならでは、はと思はる。（洗心錄）

正岡子規
名は常規。俳人。（一八六七―一八九二）

二五　實に面白かつた

正岡子規

四方太君「閑汁會」も面白かつたで先日の僕が病の會はまづ面白かつたそれに僕が寢ながらで諸君を苦しめたからでもあるこの原因ハそれ一つではあるまい日盧子に障子をあけさせて庭の鷄頭の色が美しかつたのを見て天へ登りたいやうな心持がした其の色が今に忘れぬのを見ても當日の僕の喜びが何等かの原因によつて極度に刺戟されてゐたらしがある類全膳でも柚饅でも陳腐な茶飯でもそれぞれの客に據りて拘ぞず

四方太君
坂本四方太。俳人。（一八六七―一九二七）

盧子
高濱盧子。俳人。（一八八四―一）

甚だ嬉しい雅話しに一つ面白い五目並べをやつたらしく尤も面白いうんふよ面白く嬉しいようしは減多になくてあるそれのは嬉しかつたのすぐ嬉しさの思ひない様かと心持がすると翌日君は突然僕の蘭園のよた顔を出したそれも嬉しいすると煙草の箱から西洋菓子が出た尤も嬉しかつたがうれしい舎の一日おいて次の日であつたが面白いそれを持つて来た人の木綿着物の文學士であつたのも面白い

ジュールだのフランパンだのか花火の音見たやうな名を聞きながら食つたのも嬉しかつたのを柚饅會の迎へ菓子とでも稱へて、それで餘波の盡きもしもする術し僕の心ではまだ餘波があつていやうだ

それから四五日すると君の手紙が来た例の記文だつてそれ舎の記であつたけれど直に投げて讀む氣にはなれなかつたそれから讀んで見て不愉快を起すと困るかだ君の文を見てふ愉快を記した

例は幾度もある僕の不愉快になつた結果いつでも君を不愉快にしたのだから君の記憶にも殘つて居るであらうが先づ今朝見殘しの新聞を讀んだ晩飯を食つた又新聞を讀んだ雜誌が讀んだ而して後に思ひ出して君の文を讀んだ實に面白かつた只一つ不愉快な事はなかつた今までの文に山があつて覺束ないよまつてゐるのは違ふ方山はないけれども却つて面白いまつたくだ〻〻の餘波の餘波の餘波の喜びでもあるだ

只此の後の親爺の文が何處までも變化を逞ましうするかもだ

（子規書簡集）

三上參次

文學博士。東京帝國大學文科大學教授兼史料編纂官。（一八三七―一）

二六　豐臣太閤　その一

三上參次

從來豐太閤の人物・事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記・繪本太閤記等の書にして、三國志・漢楚軍談などと共に、普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書

には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は殆ど全く忘却せられたる如く、間〻又いみじき誤謬をさへ傳へたり。太閤が無學文盲の人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

磨けば益〻光り、鑽れば彌〻堅し。眞に偉大なる人物は子細に研究するに從ひて一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑〻太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に舊大名たりし華族の諸家・古社寺・舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一・大村法橋由己等の文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして生氣に富める文書其の大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙・短冊・消息の類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先より、母なる大政所、夫人なる淺野氏、若しくは秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子・夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執り

たりしなり。

書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉秀潤等の讃美の辭を加ふることこそ敢てする能はざれ、頗る圓熟したるものにして、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩しかたも無下に卑しからず、嘗て習字せしことの無き人には、決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太

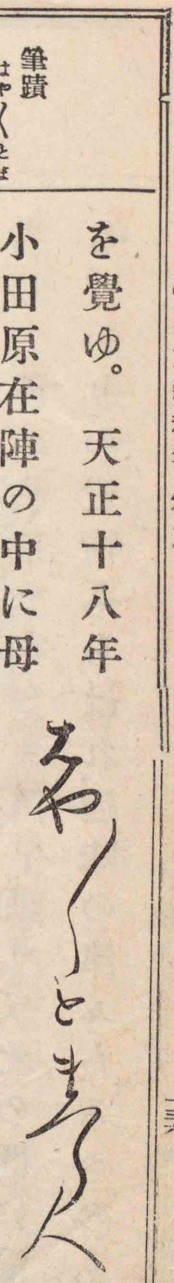
閤の簡易を喜び、敏捷を尚びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるには非ず。

豐臣秀吉（高野山蓮華定院藏）

軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛錬なしといへども、天眞爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし。而して、その間に溢るるばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものある

筆蹟
はや〳〵とまつら人おこし候事まんそくにて候そもしよりれい申候へく候さためてまつらこをひろい(ひ)候てはや〳〵と申こし候間すなわ(は)ちこのなわ(は)ひろい(ひ)こと可申候したく

を覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に母なる大政所へ上りし書中に「そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わかく御なり候て可給候。たのみ申候」の語あり。千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は此



豐臣秀吉筆蹟（史料編纂）

の「若くなり給はれ」の一語より適切なるものはあらじ。又その夫人淺野氏への書中には「ねんごろに文給はり、御げんざんのこゝろしてねんごろにみり。」ことし内にはひまあけ可參候。心やすく候べく候。かならずとし内に參候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候」等の句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしこゝに太閤の口授にかゝれりと思はるゝところあり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を奏

するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の上より觀察するときは、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲の念に富みたる善良の紳士なりしを見る。

二七　豐臣太閤 その二

三上參次

さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを賞でて、其の下に徘徊せり。後陽成帝遙に之をみそなはしてにや、畏くも敕使を遣はし、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、卽ち

忍びつゝ霞と空もにおがめしを、
あらもれけりか、花の木ろもと。

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却て淡雪のちらちらと降り來りしかば、太閤おもしろく思ひて、

時ならぬをくらの枝よふる雪を、
花をれそしとさそひ來ぬらん。

と詠まれき。　感興想ふべし。　文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山たれやむるとはなけれども、
今宵も花のうげにやどらん。

と詠じ、藏王堂にては、

歸らじとたもふ家路を入相の
うねこそ花の恨かりけり。

と歌はれたり。　巧を弄ばずしてなかく〳〵に雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐のときには和歌浦・玉津島にて、小田原陣のをりには清見潟にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少からず。　天正十六年の聚樂第への行幸のときは勿論、醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては大宮人の昔を忍ばしめ、又、時としては古英雄の横槊賦詩の面影を想はしむ。　而して功成り名遂げたる此の千古の偉人も、亦無常を感じたる事のありてにや、

露とちり雫やきゆる世の中に、
何とせちこれる心なるらん。

と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるるや、あはれにも、

露とおき露と消えにし我が身かな、
なにはのことは夢のまた夢。

といふ辭世の短册をとゞめられき。げに太閤は伊達政宗・細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短册にして、予が原本を目擊したるものゝみにても、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事

を談ぜしめて之を聽き、又禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は決して無學文盲ならざりしなり。（明治讀本）

嘉納治五郎
東京高等師範學校長。
（一八五〇—）

二八　死して惜まるゝ人となれ

嘉納治五郎

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、草木かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸・草木と異ならんと欲せば、生れがひある人とならんことを要す。予は更に前途有爲の諸子

に向つて死して學國の悼惜を受くる人たらんことを望む。

人生れて呱々の聲を發するより、長じて一箇の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩德一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の道を知らず、たゞ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此の間、晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。

之に次ぐに師長の恩あり。我等が僅に黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に說くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、我が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、その福祉を增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我

が父母師長をして我等に對する慈愛薫陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。然らずんば、我等は亂離塗炭の苦に陷らん。我等の安全なる發育を遂げて一箇の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て此等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或はその修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒に長じて、當に自營自活以てわが生育の

恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能その父母の恩に報ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆること能はざる者あり、況や國家が生を成す所以に酬ゆることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。是、所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

又その無能かくまで甚だしきに至らず、何らか一種の事に從ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅に父母を養ひ、自ら衣食して一生を

送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは僅に自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に德し、其の流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、その畢生の事業は以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは實に是に外ならず。

夫、生きて一鄕の爲に功ある者は死して一鄕の爲に惜まれ、一郡の爲に盡せる者は一郡の爲に哀しまる。若し夫、その事業國家全體の進歩を助成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝものに至りては、その事業の何たるを問はず、その人の存否は國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。是を以て其の人一たび逝くや、國を擧げて之を惜まざるはなし。嗚呼、

天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるゝもの果して幾人かある。

少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も一生の覺悟は卽ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか、一鄉・一郡の爲に惜まるゝ人とならんとするか、抑〻亦學國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。（國士）

中學國文教科書卷三終

Kokubun

ass

the

文部省檢定濟
大正七年一月九日　中學校國語科教科書

明治三十九年十月十五日印刷
明治四十年一月十八日發行
明治四十三年十二月五日修正三版發行
明治四十四年一月廿八日修正四版發行
明治四十四年十二月十五日修正五版發行
大正七年一月二日修正十二版印刷
大正七年一月五日修正十二版發行

明治四十五年二月廿六日修正六版發行
大正元年十一月三十日修正七版發行
大正三年十二月廿三日修正八版發行
大正四年一月廿八日修正九版發行
大正六年十一月五日修正十版發行
大正十年一月三十日修正十一版發行

定價	卷一・二	卷三	卷九・十
	金三拾四錢	金三拾錢	金二拾八錢
大正十年度臨時定價	金七拾五錢	金六拾六錢	金六拾二錢

著作權所有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

發行者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店（電話麹町三千八十七番）（振替口座東京三二七番）

關西專賣所　大阪市東區淡路町四町丁目四十二番地　大阪寶文館

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゝ直ちに御送附可致候

中學國文教科書　卷三

株式會社秀英舍第一工場印刷